

『靈異記』における渡来人像と朝鮮観について

金 光 林

一、はじめに

平安初期の仏教説話集である『日本靈異記』(以下『靈異記』と略称を用いる)は、古代日本人の宗教思想を知る上で貴重であるばかりではなく、古代の日本における朝鮮半島からの渡来人の活動像及び日本人の朝鮮観を調べる上でも見逃せない一書である。『靈異記』には、朝鮮半島からの渡来人と凡そその子孫と見られる人々が登場する説話が多いし、韓日兩國の古代関係史の実像を示す内容も一部ある。

渡来人が主人公として登場する説話には、上巻第四話(円勢・百濟系)、上巻第七話(弘濟・百濟系)、上巻第十二話(道登・高句麗系)、上巻第十四話(義寛・百濟系)、上巻二十六話(多羅常・百濟系)があり、朝鮮系または朝鮮半島經由の渡来人の子孫と見られる人々には、行善(堅部氏・上巻第六

話)、道照(船氏・上巻第二十二話・第二十八話)、行基(高志氏・中巻第七話・第二十九話その他)、智光(鋤田連氏・中巻第七話)、永興(葦屋君氏・下巻第一話・第二話)、三間名干岐・観規(壬那氏・下巻第三十話)などがいる。¹⁾

『靈異記』の全百十六話には、説話の主人公で名前が書かれなかったり、僧で出身が不明であったり、仏像が主人公であるなどの説話が四十八話もあるから、それを除くと、渡来人関係の説話はかなり高い比率に上る。

ところで、以上の説話を概観すると、まず、そこには朝鮮半島からの渡来人の日本における活躍ぶりを具に伝えており、いわゆる「帰化人史観」と日本と朝鮮諸国との関係を華夷思想で捉える意識が見られないのが特徴である。

つぎに、『靈異記』の上巻の景戒の序に百濟からの仏教の伝来を「浮来」(学界では、この「浮来」を漢語の「将来」の誤

りとするのが通説である」と表現し、上巻第五話に百濟を「隣国」と呼んだ点なども注目に値する。

『日本書紀』を始め、日本の古代史書、律令法などでは、対朝鮮諸国關係を自国中心主義の立場から一貫して宗主国と朝貢国との上下關係として設定し、朝鮮半島からの文物と人間の渡來をほとんど「献上」「帰化」等の表現を使って記述している。それに比べると、『靈異記』の上記の表現などは、明らかに異なる立場を見せている。

『靈異記』の渡來人關係説話および朝鮮關係記事に見られる以上のような特徴は、渡來人と係わりを持つといわれる本書の撰者景戒の出自と生活環境とも關係はある⁽²⁾が、より本質的な問題は次の二点にあると思われる。

第一、仏教が朝鮮半島を通して日本に伝來し、仏教受容の初期に大陸から渡來した人々がその伝播と普及の主な担い手となっていたことは周知の事実である。そして、既に研究者たちによって明らかにされているように、奈良時代はもちろん平安初期にかけても、仏教史上注目すべき人物には渡來人とその子孫が多かった。⁽³⁾『靈異記』が編纂された平安初期までは朝鮮半島の文化の影響がかなり残り、社会に渡來人にまつわる説話や事蹟が多く伝わっていたとみられる。このような社会背景を考えると、本書に渡來人關係説話が多く現れるのは当然なこととも言える。

第二、本書の序によって見るかぎり、景戒は中国の仏教説話集にならって日本の奇事や現報譚を集め、それによって仏法の応報と表相の価値意識を呈示し、現世の行動規範としようとしたのである。そして、その編纂意図には激動する時代に対する危機意識と仏法原理の普遍性に対する確信が同時に存在したと見るべきである。また、撰者景戒は『靈異記』の中で民衆僧としての行基に対する尊敬と支持の態度を見せており、彼自身も有力氏族または有力戸主の出ではあるが社会の支配層側とは一定の距離があったようである。以上のような点から、景戒が当時の支配者層に存在していた朝鮮諸国を蕃國視する風潮に捉らわれることがなく、社会の一般人の持っていた渡來人像と朝鮮觀をありのまま反映したと考えられる。

事実、古代日本人の朝鮮觀は、大きく見て二つの異なる様相を帯びていた。一つは、朝鮮諸国に対する優越感と蔑視の感情・意識であり、これは支配者層の国家意識と対外意識が鮮明に現れている『日本書紀』『続日本記』などの史書、「養老令」「大宝令」「令義解」などの律令法やその注釈書などに多く見られる。もっとも、このような感情・意識は朝鮮半島統一後の新羅に対して顕著であった。もう一つは、朝鮮諸国に対する親近感と朝鮮の文物に対する憧憬の感情・意識であり、これは『風土記』や『万葉集』『懷風藻』『文華秀麗集』な

どの詩文学、寺社の縁起、説話や民間の伝承などに現れる場合が多い。古代日本人の朝鮮観には、以上のような相反する感情・意識が混在しながら、それらが葛藤と相剋を繰り返したと見られる。本書で取り上げる『靈異記』は、すなわち後者の場合の朝鮮観を代表する一書とでもいえよう。

次に、本文で『靈異記』の渡来人関係説話と朝鮮関係記事を具体的に論及しながら、本書における渡来人像と朝鮮観について考えてみたい。

二、本文

『靈異記』に朝鮮半島からの渡来人と明記した人物は五人である。その中で、円勢（上巻第四話）、弘濟（上巻第七話）、義覚（上巻第十四話）、多羅常（上巻第二十六話）等は百濟からの渡來僧であり、道登（上巻第十二話）は原文に「高麗學生道登者元興寺沙門也。出自山背惠滿之家」と書いてあるように、高句麗という出自ははっきりするが、どうも渡來人一世ではないようである。以上の五人の中で、道登が『日本書紀』『扶桑略記』『宇治橋断碑』（現存）に記録が見えるが、他の四人は未詳である。しかし、撰者景戒が全く虚構の人物を取り上げたとは考えにくく、当時、社会に伝わっていた渡來人関係の説話を適当に撰載したと思われる。

以上の五人は説話の中でいずれも有徳の僧か、先知・非凡

の能力を具した人物として登場している。

上巻第四話の中の円勢は同じ寺（高宮寺）⁽⁴⁾にいる願覚法師が聖の生まれ変わりである事を予知している。この説話のテーマは、「聖人は聖を知り、凡人は知らず」ということである。願覚が聖であることは、凡人の優婆塞には分からなかったが、円勢は見抜いていた。つまり、百濟僧の円勢が高く評価されている。この説話が聖徳太子の「片岡飢者説話」と並列してあるところにも意味がある。上記の説話のテーマも「聖人は聖を知り、凡人は知らず」ということであるが、ここでは、その理を説明する事例として聖徳太子と円勢法師を取り上げている。

上巻第七話の中の弘濟は非常に有徳な僧である。百濟救援に参加した備後国三谷郡の大領の先祖の要請によって来日した禪師弘濟は、三谷寺⁽⁵⁾を始め多くの寺院を建て、各地の人々に尊敬されていた。彼は京に上って仏像の造立に使う金丹を入手して三谷寺に帰る途中難波の津で亀四匹を買って海に放った。それから、船に乗って海を渡る途中、欲心を起こした舟人達によって海に沈められたが、難波の津で放生した亀に助けられた。その後、盗んだ金丹を売るため三谷寺を訪れた舟人たちを、弘濟は刑罰を加えなかった。そして、仏像や塔が完成し、供養が終わると、弘濟は海辺に住み、往來の人びとを教化した。この説話は亀の応報譚がその骨子となってい

るが、それは中国の仏教説話集『冥報記』の中の楊州の嚴恭の説話の影響を受けているという。そうだとすれば、わざと百済出身の高僧伝の形を取ったところに当時の日本社会における朝鮮諸国出身の僧たちの名声の高さが窺える。ちなみに、『日本書紀』『上宮聖德太子伝補闕記』『上宮聖德法王帝説』『聖德太子伝曆』などに見える「慧慈悲歎説話」は、高句麗の慧慈を登場せしめ、その口を籍りて太子が「聖人」である事を表白せしめている。慧慈は、飛鳥時代の仏教興隆の中心である法興寺に住し、「三玉之棟梁」とされたが、当時の代表的・指導的な異国の僧によって、聖德太子の超人間的卓越性を表そうとしたのが「慧慈悲歎説話」の意図である。これも上記の事実の一つの証左であろう。

上巻第十二話の道登は、大化元年に十師の一人に選ばれている人でもある。『日本書紀』白雉元年二月条によれば、地方から白雉が天皇に献上された時、道登が高句麗国の白鹿蘭寺の由来を説き、白雉も瑞祥であると奏上したという。説話の中で、元興寺⁽⁶⁾の学問僧道登は宇治橋架橋の時に奈良山の谷間にあつて、いつも往来の人や獣に踏まれていた髑髏を哀れみに思い、従者の万侶に命じて拾い上げて木の上に置かせた。その年の大晦日の日に人に変わった髑髏が恩返しに現れて万侶に御馳走をし、自分が兄に害された経緯を語る。ここで道登は有徳な僧であるばかりではなく、土木技術者でもある。上

巻第七話の弘済が寺院と仏像の造立者であり、上巻第二十六話の多羅常が医術に長けていたのを見れば、これら渡来僧たちが仏教ばかりではなく、各種の先進技術を身につけていたか、あるいは各種の技術集団を伴って来日したと思われる。

上巻第十四話の義賞は百済が滅びた後、日本に渡り難波の百済寺に住んでいた。その彼は同寺の僧たちにとって、一夜に『般若心経』を百遍ばかり誦し神通力を身につけた、不思議な存在であった。

上巻第二十六話の多羅常は百済出身の禪師で、大和の高市郡にある法器山寺⁽⁷⁾に住んでいた。咒術によって病者を蘇らせるので名声が遠くまで伝わり、多くの人々が帰依し敬い、天皇も尊敬して常に供養した。

『靈異記』には、僧侶で名前と出身が分かるのが三十余名登場するが、その中でも、これらの渡来僧と渡来人の子孫と見られる僧たちの名声は断然と高いのである。行基はもちろんのこと、上巻第六話の行善、上巻第二十二話、第二十八話の道照、中巻第七話の智光、下巻第一話・第二話の永興、下巻第三十話の勸規等も有名な僧である。

行善は一名河辺法師と呼ばれ高麗に留学し、遣唐使にも選ばれて唐の皇帝に重んぜられた。彼は高麗に留学していた際、困境に出会い観音菩薩にすがって祈ったことにより、現世で果報を得る。

道照は勅命を奉じて、仏法を求めために唐に渡り、高僧玄奘と巡り合って弟子となる。帰国後、あまねく各地を遊歴し、仏法を広め、人々を教化した。臨終に際しては、光を放つ奇瑞を示して大往生を遂げる。

智光は生まれつき賢く、智恵第一と言われ、多くの仏經の注釈書を作り、学生たちに仏法を教えた。行基が大僧正に任じられ、天皇に重用されると嫉妬したために、現世で閻魔王宮に行き、地獄の苦を受けてから行基が本當の聖人である事を知る。

禪師永興は海辺の人々に仏法を教え導き、彼らから菩薩と呼ばれていた。

勸規は生まれつき手先が器用で、同時に多くの学才ある僧たちを統括していた。彼は死んで二日後に生き返り、生前に仕残した十一面觀音菩薩の木像の完成を弟子たちに頼む立派な僧である。

以上の渡来人の家系を引く僧たちは、その祖先たちが来日して既に時間が立ち、彼らの日本化もかなり進んだのである。うから、その家系にこだわって朝鮮諸国とのつながりばかり強調するのは無理なことである。けれども、渡来人とその子孫たちが長い間、自分たちの出自を意識し、大陸や朝鮮半島の先進文化の伝来と受容の先頭に立ち、社会の指導的地位を占め、日本と中国大陸と朝鮮諸国との間の橋渡しの役割を演

じたことは事実である。

『靈異記』とほぼ同年代に編纂された『新撰姓氏録』に畿内の主な氏族一、一八二氏の家系が載せられているが、その中で「諸蕃」（漢・百濟・高句麗・新羅・任那）に入る氏族は三二五氏、それに卷末の祖先のはっきりしない「未定雑姓」一一七氏の中にも「諸蕃」と思われる氏族が五十氏ほど混じっているから、結局「諸蕃」は三八〇氏近くなる。この『新撰姓氏録』の家系をそのまま信用するわけには行かないが、本書が編纂された当時、畿内の有名氏族の中の相当の部分が大陸や朝鮮半島からの渡来人の子孫であり、彼らもまたその出自を意識していた事は確かである。

仏法を学びに上記の行善が高句麗に留学し、道照が唐に渡ったのも、古代の日本における渡来人とその子孫たちの特殊な位置を物語る。これらの人々は在来の日本人より外の世界に対して比較的明るく、また外との血縁的・文化的つながりを保っていたため、大陸や朝鮮半島の先進文化を自ら日本に伝来したか、あるいはその受容の先頭に立ち、それを背景に社会の指導的地位を占めていたことは容易に考えられる。このようなことは、遣隋・遣唐使、遣新羅使及び遣渤海使にも多く見られる。例えば、推古十六年（六〇八）に小野妹子に従って遣隋使に行った高向玄奘（高向漢人玄奘）・僧旻（新漢人旻）・南淵漢人請安らは後に「大化の改新」のブレーンを勤

めるが、彼らは渡来人の子孫であった。⁽⁸⁾ 全部で十五回の遺渤海使にも高元度(第四回)、陽候玲瓏(第五回)、高麗大山(第六回)、高麗殿嗣(第九回)らの渡来系の人々が、正使として加わっていた。

史学者井上光貞氏は論文「王仁の後裔氏族と其の仏教——上代仏教と帰化人の關係に就いての一考察——」の中で、王仁の後裔氏族の特性について(イ)大陸・半島との交渉の持続、(ロ)大陸・半島の宗教・風俗の保持、(ハ)大陸の智的文化の伝達と規定していたが、多くの渡来氏族の場合このような特性を持ち合わせていたと言えよう。ただし、これらの渡来系の人々がただ大陸の文化を伝達しただけではなく、自ら日本の歴史と文化の創造に加わったということも見逃せないと思われる。以上、『靈異記』の渡来人關係説話を調べてみたわけであるが、そこには彼らの事蹟が詳しく伝えられており、一側面ではあるが古代の一般の日本人の持っていた渡来人像と朝鮮觀が窺えた。

本書の上巻の景戒の序に百濟からの仏教の伝来を「浮来」と表現し、上巻第五話に百濟を「隣國」と呼んだのも、一般の日本人の朝鮮觀を反映したものであろう。既に渡来人關係説話から、古代の日本において渡来人は大陸と朝鮮半島の先進文化の伝達者であり、社会の指導的地位を占め、人々から信頼と尊敬を受けていたことが分かったのである。この事から

類推して同時代の多くの人々は、中国大陸と同じく朝鮮半島を文化的先進地域として認識して朝鮮の文物に対して憧憬の感情・意識を抱き、王権と王権と間の國家觀と複雑な恩讐の關係とは別の次元から朝鮮諸國に親近感を持っていたと言えると思う。『日本書紀』『続日本記』などの古代史書は、渡来人および朝鮮關係記事を相当多く載せてはいるが、律令時代の支配者層の絶対國家觀と華夷思想が色濃く反映されているのでそこから渡来人の役割と存在意義、朝鮮諸國と日本との關係の実像を問うのは自ずから限界がある。

渡来人像をめぐる一般民衆と支配者層との間の視覚の差異を反映した典型的な例が天日槍渡来伝説である。

天日槍渡来伝説は、紀元前後に朝鮮半島の弁韓地域からの鍛冶技能集團の渡来を反映したものと見られ、天日槍を始祖とする出石種族は但馬、播磨、淡路、近江、若狭、摂津、筑前、豊前、肥前等に渡り、広大な分布を持っていた。この種族から田道間守、清彦、神功皇后の母君らが出ており、日本神話との深い關係が窺える。

天日槍渡来伝説は、『記紀』や『風土記』に見えるが、その内容はそれぞれ若干異なっている。

『風土記』(この伝説は「播磨風土記」に出ている)では神代の事として語られ彼は天日槍命として、大汝命と相競う強力な神とされている。すなわち彼が韓國から播磨の宇頭河まで

来て葦原志挙平命に宿を乞うたところ、海中ならば良いと許したので、天日槍命は剣で海水をかいて宿った。大汝は大いに恐れ、先に国を占領しようと思磨を巡って粒の丘に上り、食事をしたが口から飯が落ちたので「粒丘」という地名となった。また穴禾郡の奪谷は天日槍と大汝が谷を奪い合った地と伝え、御方の里の条ではこの二神が土地を奪い合い、各々黒葛三本を足に著けて投げたところ、大汝の一本は但馬の気多郡、一本は夜夫郡、一本はその村に落ちたが、天日槍のは三本とも但馬に落ちたためおのおのそこを領することになったと伝える。この伝説は出石人と出雲人との勢力争いを神格化したものと見られる。

『古事記』では応神天皇の段に天之日矛の名で見える。そこには、天之日矛は新羅の王子で、日本へは逃げた妻を探して来る。天之日矛は日光感精によって生まれた女を妻にしたが、その妻は夫の悪口に耐えられなくて、小舟に乗ってこっそり祖国である日本へ逃げ帰り、難波に留まった。これが難波の比売許曾根神社に祭られている阿加流比売神である。天之日矛は、妻が逃げ帰ったということを知り、早速後を追って渡来し難波に上陸しようとしたが、渡しの神に遮られたので多遲摩国（但馬国）に留まり、その地の女前津見と婚して子孫を残した。また彼は珠・比礼・鏡など八種の神宝を持参し、それは出石神社に祀られている。

『日本書紀』では垂仁天皇三年の春の条に天日槍の来日を伝えている。天日槍が船に乗って播磨国の穴禾の邑に来たので、天皇が臣下を派遣して調べてみると、彼は自分は新羅国の王子であるが日本の国に聖皇がいらっしゃると聞いて国を弟に任せて来たと申し、珠刀・槍・熊の神籬・鏡などを奉った。天皇は天日槍に播磨国の穴禾の邑と淡路の島の出浅の邑の二つの中から好きな所に住むようにと言われ、天日槍は自分で諸国を巡り見て住所を選びたいと願い出て許されたので、宇頭河を遡って北の方の近江の吾名の邑に入って暫く住み、また近江から若狭の国を経て西の但馬の国に至りそこでその地の女麻多鳥をめどって定着した。その子孫に清彦、田道間守等がいる。

このように、『風土記』では天日槍の来日を神代の事とし、彼は天日槍と戦いながら但馬の国に定着するが、『古事記』では妻を追いかけて日本へ渡り、渡しの神に遮られて妻に会えず但馬国に留まる。『日本書紀』では天日槍が天皇の聖徳を従って来日することになる。『風土記』は播磨の国に伝わっていた原初的説話を載せ、『記紀』では政治的潤色がなされた事は比較的明らかである。

天日槍渡来伝説が示すように、朝鮮半島からの渡来人の来日の流れは既に日本の民族国家が形成する前から始まった。そして、これらの人々が日本の民族と国家の形成に加わったこ

とも動かしたい事実である。しかし、『日本書紀』では、日本と朝鮮半島との通交は日本の王権が確立した後の神功皇后の三韓出征後に始まり、両者の関係は始終日本側が優位を占め、日本は朝鮮半島からの人的・文物の渡来を主体的に、選別的に受け入れたと記述し、後の史書も概ねこのような記述を踏襲したので、日本の古代史書だけに頼っては渡来人の役割と存在価値及び韓日関係史の実像を問うのは自ずから限界がある。このように考えると、以上の問題の研究はもっと多様な材料と側面からめアプローチが必要であり、その点において、『靈異記』の渡来人像と朝鮮観を調べるのもそれなりの意味はあると思われる。

注

(1) 堅祖氏(かたしべ、かたそべ)は、『新撰姓氏録』の「未定雑姓」の中に「百済國人堅祖為智」の子孫としており、『書記』の孝徳紀に「狛ノ堅祖」とあるから、この氏族が朝鮮半島からの渡来系である事が分かる。船連氏(ふなのむらじ)は、船史の後の船氏の宗族でこの氏族は百済の王族の出とされる。行基の俗姓高志(こし)は王仁を祖とする西文氏(かわちのふみ)の文脈であり、彼の母の姓蜂田(はちだ)も百

済からの渡来氏族の姓である。智光は俗姓を鋤田連(すきたのむらじ)から上村主(かみのすぐり)と改めたのを見ると渡来系である可能性が高い。なぜなら「村主」(すぐり)は朝鮮系の渡来人が使った姓である。彼の母の姓飛鳥部造(あすかべのみやっこ)は百済系の氏族である。葦屋君氏は摂津の葦屋漢人の一族で『新撰姓氏録』に「葦屋漢人」(摂津國諸蕃)、「葦屋村主」(和泉國諸蕃)がありそれぞれ漢、百済からの渡来系としてある。ただし、いわゆる漢系とされる氏族のほとんどが元は中国の出身であるが、朝鮮半島で土着化を経て来日している。壬那氏(みまな)は三名間氏(みまな)とも呼び、加羅國の王族の出とされる。

(2) 景戒の出自については、現在のところ、(イ)小子部氏関係説(柳田国男)、(ロ)大伴氏関係説(志田諱一等諸氏)、(ハ)渡来氏族関係説(原田行造)の三つの説があるが、いづれにしても、景戒が渡来氏族と学問の上でつながりを持っていたことは十分考えられる。

(3) 井上光貞氏は論文「王仁の後裔氏族とその仏教——上代仏教と帰化人の関係に就いての一考察——」(『史学雑誌』五四—九、一九四三年に所収)の中で、奈良時代から平安時代の初期にかけて活躍した僧侶で道慈、智光、慶俊、勤操、道照、義淵、行基、良弁、慈訓、護命、行表、最澄、円珍等十三人を渡来系としている。一方、川副武胤氏は著書『律令の国』(評論社一九七七年)の中で、以上の人々以外にも渡来系僧

侶として二十六人を上げている。

(4) 大和の葛木の高宮郷にあった寺で、現在は礎石だけが残されている。

(5) 現在の広島県三谿郡三谷郷にある大伽藍の跡に比定される。

(6) 大和飛鳥地方にあった寺。現在の安居院・飛鳥大仏の地。崇峻元年(五八八)に蘇我馬子が創建し、推古四年(五九六)完成した法興寺(飛鳥寺)をいう。これを元興寺といい、のち平城遷都に際して新都に移したものを新元興寺という。

(7) 現在の高市郡高取町の子島寺、南法華寺が擬せられるが、断定できない。

(8) 漢氏(あや)は四・五世紀以来、中国系と称して朝鮮半島からきた渡来氏族である。上記の三人は皆この氏族の出身と見られる。

(9) 高元度は高句麗系の人で、唐と渤海と外交に当たっていた。高麗氏の二人は高句麗が滅亡した際来日した高倉(高麗)福信の一族であり、陽侯玲璆は漢系の陽侯史氏(やこのふびと)の家系を引く者と見られる。